○開幕～母と友人の関係～

……はぁっ、……はぁっ、……ぁあっ！

――二人の男女が激しく交わっている。

はぁっ、はぁっ、はぁっ、ソフィア……ソフィアっ

ベッドの上で尻を高く上げ、四つん這いになる女。その後ろからパンパンと音を立てながら、その女の尻に容赦なく腰を叩きつける男。

はぁっ……はぁっ、……だ、だめっ、もう、無理ぃ……！

もう力が入らないのか、女は長い金髪を揺らしながらブルブルと腕を震わせる。

そのまま倒れこむように顔をベッドへと押し付けるが、男は逃がすまいとその白い腰を力強くつかみ、さらに勢い良く腰を振り始める。

……あっ、……あぁんっ！……はぅっ、……！ くぅ……ぁんっ！

男の責めに耐えかねてか、女が背をよじらせながら、きつくシーツを握りしめる。

そしてついに――

――は ぅっ！

うぐっ……！くぅっ！

男は一層強く腰を押し付けると、そのままピクっ、ピクっと小刻みにお尻を振るわせ始めた。

――フリードが、母さんの中で射精している。

母さんに重なるように並んだお尻の下、ギュウッ、ギュウッと絞り出すように収縮を繰り返すフリードのお尻。

お尻の下で睾丸が引き絞られるたび、母さんに突き立てられたフリードのペニスが、大きく脈打ちながら大量の精液を打ち込んでいく。

その吐精を、自ら搾り上げながらすべて受け止めていく母さんのクレバス。

その赤い花びらのような割れ目から、白い精液があふれ出ては糸を引きながらベッドへと落ちる。やがて、すべて吐ききったのか、フリードの射精が勢いを失っていく。

繋がったまま、崩れるように折り重なる二人の体。

ベッドに滴り落ちる残滓を眺め、僕は複雑な気分でその場を後にしたのだった――

……はぁ……はぁ……はぁ

……ごめんなさい、キール。

あなたのお友だちと同じベッドの上で乱れてしまう母を見て、あなたがどんな気持ちでいるのか、私(わたくし)にはわかってあげられないけれど……。

――ですけれど私(わたくし)がフリード様を受け入れるのは、とても自然なことなのです。

何故なら彼は、……あなたのお友だちはフレアの、あなたの妹にとってはお父様にあたるお方なのですから。

○精通～おばショタ童貞喪失～（バイノーラル）

私は下級貴族の妻となることを選んだ女です。

旦那様のお客様がご訪問くださいました折には、夜のお供で歓待するのが務め。

時に旦那様にも触れられたことのない不浄の穴を、見ず知らずの殿方に捧げたこともありました。時に複数の殿方に挟まれ同時にお相手させられたこともございました。

お相手の殿方が年配の方であろうと、変態的なご趣味をお持ちであろうと、親族である叔父が相手であってさえも、己が責務と自分に言い聞かせ続けて参りました。

そうして殿方のお好みの人形を演じ続けた、とある夜のこと。

いつものように叔父様を待っていた私の前に、夜の闇をまといて彼の方はお越しになられたのでした。

「きゃっ？！

お、驚きましたわ……。

どうして私のお部屋に？

……ああ、眠れないのですね。それはお可哀想に。眠りが訪れるまで手を握って差し上げたいところなのですけれど。

ですが、ここにはもうすぐ叔父様がいらっしゃいます。どうかお父上に叱られる前に、お早くご自分のお部屋にお戻りなさい。

……え？ 今宵は叔父様がいらっしゃらない？

……そうですか。そういうことであれば、わかりました。おばさんでよければどうぞこちらへ。体を冷やす前にお布団の中へお入りなさい。

あらあら。……そんなに慌てて、どうしかしたのかしら？怖い夢でも見てしまいましたか？

いけませんよ。叔父様のお跡を継がれようというお方がいつまでも甘えていては。

……きゃっ？！あ、きゅ、急に何を……ふふふふ！く、くすぐったぃ……！ぁん、……

そ、そんなところに手を入れてはいけません……！うふふふふふ！

も、降参、降参です！私が悪かったですわ！子ども扱いしてしまって、申し訳、ありません……！うふふふふふ！

もう、困ったお方ですこと。

……どさくさに紛れて、こんなにも私の服を脱がせてしまわれて、……いったいどうなさるおつもりですか？

それに、この先ほどから私の太ももに当たってます熱くて硬いものは何ですかしらね？

――ぁん！

……うふふ。あらあら、反撃のおつもりですかしら？

でも残念ですが、そんなに必死にお乳に吸い付いても、それではただ可愛らしいだけで、私を参らせることは叶いませんわ。

……いいこと？本当に女性を骨抜きになさりたいのでしたら、こうもっと唇を使って……。

ん～ちゅっ。

うふふふ。驚かせてしまいましたわね。耳にキスをされたのは初めてですか？

では、次はもう少し長めにいきますわよ。

（耳キス）

ぁん！じっとしてくださいませ、そのように逃げられては舐めて差し上げられませんわ。

……仕方ありませんわねぇ、それでは……えいっ！

うふふふふ。こうしてギュウッと抱きしめたからにはもう逃がしませんわよ。

それでは、ん～ちゅっ、ちゅちゅっ、……んふぅ。

（耳舐め）

……ふぅ。

次はこちらも。

（耳舐め）

……はぁ。

クス。

……あらぁ？そんなに強く私を抱きしめられて、どうなさいました？

それになんだか息遣いも荒いようですけれど、もう少し力を抜いて下さいませ……こちょこちょこちょこちょ～

うふふふふふ！

あらあらぁ？ちょっとうなじを撫でて差し上げただけですのに……。

すぅー……ちゅっ。

……うふふ。そのように可愛らしい声を出されては、もっと苛めたくなってしまいますわねぇ、クスクス。

……ね。このようにして触れて差し上げれば、体はすごく素直になってくれるものなのです。

さぁ、ところで、こぉんな状態でオッパイを舐められたらどうなってしまうでしょうね？

うふふふふ！あぁんもう、そんなお顔をされたら、たまりません……！

とてもいいお顔をされてますわよ。

怖いですか？どうなってしまうかわかりませんものね？

……でも、同じくらい楽しみでしょう？

こうしていても逃げ出そうとしないのがその証拠ですわ。
力が入らないのですか？
……ふぅん？それじゃあ仕方ありませんわねぇ。
じゃあ、今夜はもうおしまいにいたしましょうか？
……クスクス。冗談です。そんなお顔なさらないでくださいな。
それでは、いきますわよ……。
あー……ん、ちゅうっ。

（舐め）

（キス）

……ふぅ。
では今度はもう片方も……んっ。

（舐め）

（キス）

……っはぁ。
いかがでしたか？
乳首を舐められるととても気持ちいいでしょう？
あら。お口からよだれが垂れてますわ。
失礼しますわね。
んっ、ちゅっ、ちゅるっ……。

（キス）

綺麗になりましたわ。

……あらぁ？

せっかくお口元は綺麗になりましたのに、もう一か所汚れてしまってる所がありますわね。

先ほどから、まるで熱した鉄の棒みたいなものを私の太ももにグイグイ押し付けてきてますけれど、その先端からどんどんと、はしたないおつゆが溢れてきてますわ。

ここはどうしてこんなになってしまってるのでしょうねぇ……こちょこちょこちょ～！

うふふふ！

あぁもう、すっごく気持ちよさそうこと！

……うふふふふ！

う～ん。先の方はまだ皮かむりみたいですわねぇ。それに、私の手の中にスッポリと隠れてしまって、とってもおちんちん可愛らしい。

……気持ちいい？

気持ちいいのでしょう？

うふふふふ！そんなにはぁはぁと息を荒くしてしまって、……今、何をされてるかお分かりかしら？

今、貴方の硬くなったおちんちんは根元の方から私の小指、薬指、中指、人差し指にギュウッと握られて身動きできなくなって、それからぷっくりと膨れた先っちょのほうは皮の上から私の親指の腹でグリグリと撫で回されてしまってますわ。

こういう風に……。

……コリコリコリコリ～、うふふふふふ！

あぁん、また口からよだれが零れてきてしまってますわ。

大丈夫です、全部私が吸い取って、綺麗にして差し上げますからね。

（舐め）

（キス）

もうよだれをこんなにもいやらしくトロトロにさせてしまって。そろそろ辛抱できなくなってきたかしら？

あぁもう、そんなに苦しそうなお顔をして、可哀相に……。

このまま私の手でゴシゴシしてすっきりさせて差し上げてもよろしいのですけれど。

……ねぇ、せっかくですし、このまま、おばさんと一緒に、大人の階段、……上ってみないかしら？

貴方もそろそろ女性の扱いを知っておいてよろしいお年頃ですし、せっかくのいい機会ですもの。

おばさんがご指南して差し上げてよ。

うふふふ！

そう焦らないで。

私はそれだけ求められるとうれしいですけれど、あまりがっつくと若い女性には嫌がられてしまいますわよ？

クスクス。心の準備はできました？

よろしい。

それじゃあ、まずは貴方のその大事なところ、皮に隠れてしまってるおちんちんの中身をお外に出してあげましょうね。

おばさんがむいてあげますから、よぉく覚えるのですよ？

こう、親指と人差し指で先の方をつまんで、ゆっくりと下に引いてあげるとぉ、……ほぉら、皮がめくれて、まだ可愛らしいピンク色の先っちょが出てきたでしょう？

これをね……。

あ、ちょっと手を貸して、おばさんのここ、足の間のここを触って……んっ、……はぁっ、……うふふ、貴方の指、冷たくて気持ちいい。うふふ。……ねぇ、おわかりになって？今貴方の指が入ってる所、すごく濡れてるでしょう？

ここへ、貴方のこのぷっくりと膨れたおちんちんを入れて、それから、こうやって……んっ、ぁっ、……わかるかしら？今貴方の人差し指がクチュックチュッて、音を立てて、おばさんの中を出たり入ったり、してるでしょう？こんな風に、指よりもっと太い貴方のおちんちんで、おばさんのここをもっとグチュグチュッて、強くこするとね、……この、ヒクヒクしながら今貴方の指をおしゃぶりしてるおばさんのここが、すごく喜んでね、貴方のおちんちんを大好きって、いっぱいドロドロになったおつゆを出しながら、もっとギュウって締め付けて、……ヌルヌルドロドロになったここを貴方のおちんちんがまたグチュグチュってこすって……それはもう、背中が震えるような、天にも昇れるような心地になってしまうの。

……うふふふ。ごめんなさい。焦らしすぎてしまったかしら？

それじゃあ、いいかしら、おばさんの足の間に入って、そう、上から覆いかぶさるようにして……あ！慌ててないで……。そのまま、ジッとして、……今日は初めてですからね、おばさんが手で誘導して差し上げますから……。……はぁっ。わかるかしら？今、貴方のおちんちんの先がおばさんのパックリ開いた下のお口に当たってるのですよ。そのまま、そのままっすぐ腰を突き出して――ぁうんっ？！

あ、ちょ、ま……あ、慌てないで……！も、もう、少し……ゆっくり……あぁんっ！……んっ、くっ、……ふぁっ、か、……硬い……！……はぁっ、か、硬いのが、若くて、硬いのが私の中で、暴れて……ふっ、ウフフフ！

でも、そんなに急に腰を振ったら……きゃうんっ！

……ぁ、つぅっ……ぁんっ……す、すごい、勢い、で、出てる。あぁ、あったかい……こんなにいっぱい、出されたら……あ、溢れてしまって……は、恥ずかしい……。

……うふふふ。震えてますわよ。それに、こんなに強く叔母さんのこと抱きしめてくれて、可愛らしいこと。

……はあぁ。温かい。

わかるかしら？

貴方のおちんちんがおばさんの中に刺さったまま、元気に跳ねながらおばさんの中に直接ビュルビュルって、勢いよくお精子をいっぱい出してるの。

……こうしてね、愛する殿方にめいっぱい強く抱きしめながら、お腹の中にぬくもりが広がっていくのが女にとって一番幸せを感じられる瞬間なのです。

もっといえば、行為の最中に優しく、激しく、絶頂の頂まで上り詰めさせて下さる殿方との夜は、いくつになっても胸をときめかせてしまうものです。

……その意味では、今日のあなたは残念賞ね。
クスクス。初めてなのですから致し方ありませんわ。
焦らずとも、私がこれからいくらでもお相手して差し上げますから、少しずつ女の扱いに慣れていけばよろしいのです。

……さしあたっては、ウフフ、今宵もまだ、朝を迎えるまでたっぷりと時間は残っておりますわ。

私の指をくわえてごらんなさい。
……ウフフフフ。貴方の唇は柔らかくてとっても素敵、それにお口の中はまるで気持ちよくなってしまった私のアソコのように熱くてドロッとした涎が溢れてきて、こうして触っているとなんだかすごく興奮してきてしまいますわ。
クスクス、さぁ、そろそろ私の指を気持ちよくしてくださいな。口をすぼめて、ちょっとずつ強く吸って、それから舌を絡めて……はぁっ、あぁ、そう、そうです。お上手ですわ。
では次は指の腹を啄むように舐めながら、人差し指と中指の間に、……んっ、そう、もう少し、舌を伸ばして、中指の方に移って、それから手の甲に口づけて、ああぁ……ゾクゾクしますわ。とってもお上手……お、お次は手首の内側へ下を這わせて、ああああぁ、上がってくる、私の腕を伝ってどんどん、どんどん上ってきますわ……！はあああぁ……。
ぁんっ、そ、そこ……！二の腕のところ、ああぁ、ゾクゾクきてしまいますわ……！お、お上手です、はぁ……こっちの、空いた手で乳房も、もう少し、強めにギュッと……んんっ、
……ぁんっ！ぁ、だ、だめ……です！そ、そこは、……脇は、だ、ダメ……ふぁぁんっ！

……はぁ、はぁ、はぁ……あぁぁ。そ、そろそろ、ここも舐(な)めて下さいませ。貴方(あなた)の舌がいつくるかと、はしたなく硬(かた)くなってしまった私(わたくし)の乳首を。どうか……んはあぁぁぁ……！あぁぁ、そう、ですわ。舌先で転がすようにして……ぁんっ！だ、だめです、……す、吸(す)い上げるときは、もっと強弱(きょうじゃく)をつけて……！

そう、そうですわ……！

うふふふ！よろしくってよ、そのまま続けて……ぁんっ、……ウフフ、おほほほほほほほほほ！」

○終幕～貴族妻の華麗なる秘め事～

そうして、私は彼が訪問するたびに肌を重ねるようになりました。

それまで、私にとって夜のお相手はあくまでご奉仕でしかありませんでした。

ですが、

――ぁっ、だ、だめですわ。まだ明るい内から……。

お、おやめなさい。服の間から手を差し込んではいけません……！

どうか、夜までお待ちになって……！

こ、このようなところ、……旦那様にはともかく、あの子に見られては……あぁんっ！

どんどん熟達しながら、より一層に私を求めて下さる若い彼の愛撫に、私は身も心も悦んでしまい、互いに溺れるように幾千の夜を共にして参りました。

そして今では――

んあああぁんっ！

……はぁっ、はぁっ、はぁっ、あああぁん！

あああ、あの頃はあんなにも小さくて可愛らしかったですのに。

それが、今ではこのように逞しくなってしまって……！

その上、もう私の全身どこも貴方様の手と口の感触を覚え込ませられてしまって……もうあそこもお尻も足の指先さえも余すことなく、貴方様に触れられたことのないところなどなくなってしまって……こうして触れられているともう、……も、もう、たまりません

……！

また、……またイってしまいそうです……！

ど、どうかお願いです、後生ですから、イク時は貴方様の、この逞しいおちんちんで！

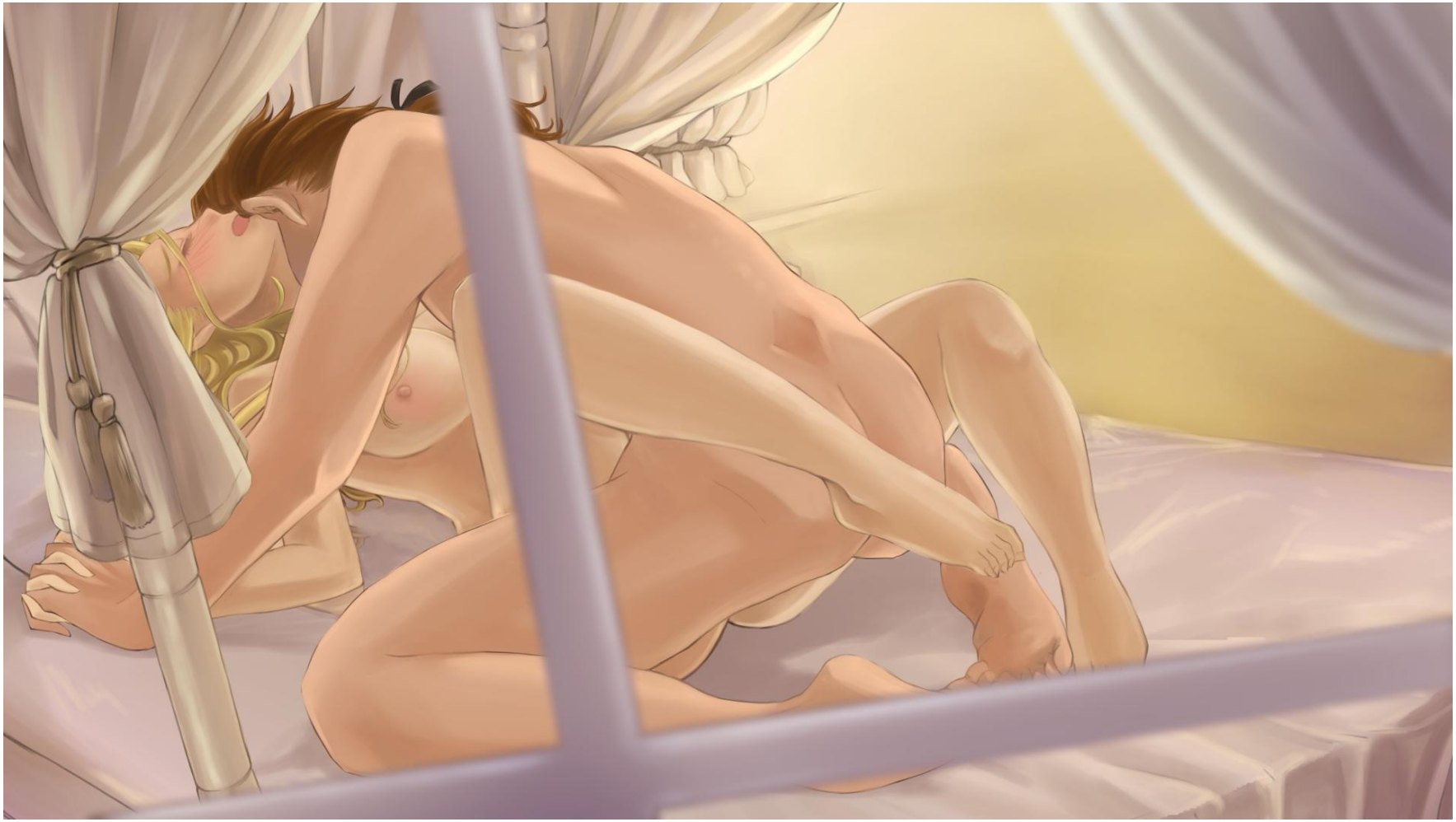
硬くなった貴方様のおちんちんで、ドロドロになった私の中をめちゃくちゃにかき回して、私の中をまた貴方様で溢れるほどに満たして下さいませえぇー！

――太くたくましくなったおちんちんに貫かれ、一回りも大きくなった力強い腕に優しく抱かれながら、私は体の最も深いところで彼の子種を受け止める。

そのことにこの上ない幸福を感じさせられるようになってしまいました。

これはひどい裏切りなのかもしれません。

ですが、私には旦那様が二人いらっしゃるのです。

貴方の母は、もう何年も前から、

――貴方のご友人を心底から愛しています。